

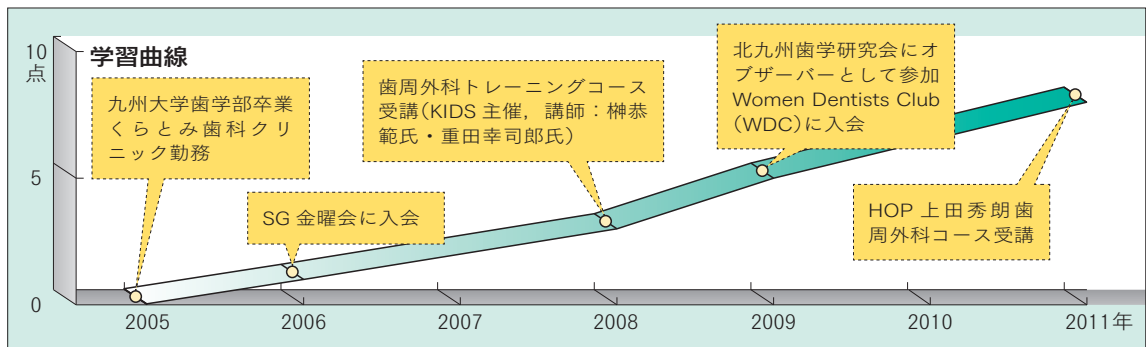
歯の保存に全力を尽くす 歯内 - 歯周病変を有する一症例

柴原由美子

キーワード：デンタルエックス線写真，垂直性骨吸収，根尖性歯周炎

臨床経験年数

2005年3月に九州大学歯学部卒業後，同10月，くらとみ歯科クリニック勤務(現在勤務6年)．2009年には北九州歯学研究会にオブザーバーとして参加し始める．また Women Dentists Club(WDC)にも入会，現在に至る．



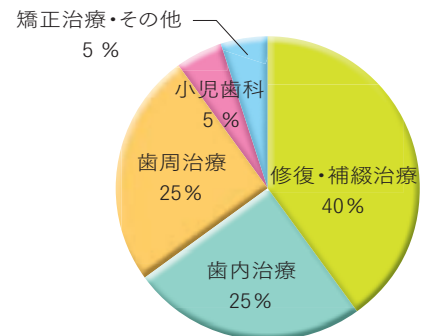
診療方針

歯の保存に努め，患者にとって最良の方法を提示しながら，心が通じ合う治療を行うために何よりも説明を大事にしている．自分の行った治療を客観的に比較評価するために，規格性のあるデンタルエックス線写真を撮影するように心がけ，治療の経過を追って学ぶ，という姿勢で日々の臨床に取り組んでいる．

日々の臨床

乳児から高齢者まで患者年齢層は幅広い．郊外の住宅地が密集している地域で，家族での来院も多く，小児の治療から義歯製作などの歯科臨床全般を行っている．臨床内容としては，保険診療が大部分を占めるが，矯正などの自費診療も行っている．

【日常臨床で頻度の多い割合】



企画趣旨

患者の主訴や口腔内の状態など、その背景はさまざまであるが、「1 歯の治療にこだわること」、それがすべての基本であり、はじめの1 歩といえよう。

本欄では、患者の背景を踏まえつつ1 歯に対する治療にこだわる若手歯科医師に、どのように診査・診断し、治療計画を立て、治療結果を得たのか、その患者と信頼関係を築くまでの過程を自己評価も含めて提示いただく。また、師匠や先輩歯科医師からのメッセージもあわせて掲載。

「基本治療にこだわる！」

柴原由美子

Yumiko Shibahara

くらとみ歯科クリニック
連絡先：〒800-0207 福岡県北九州市小倉南区
沼緑町1-20-14



初診時の状態

図 1a 図 1b

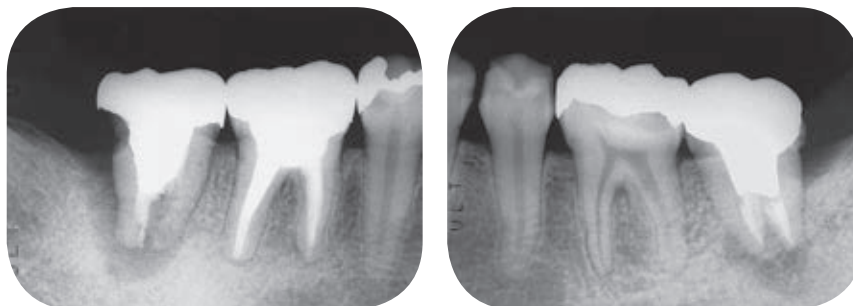


図 1a, b 初診時のデンタルエックス線写真(2007年6月)。初診時には、7打診痛、咬合痛、遠心歯肉の腫脹、排膿があり、動揺度3であった。7に打診痛、咬合痛があり、動揺度2であった。

患者のバックグラウンド

- 患者：34歳，女性。真面目な性格。重度糖尿病であり，全盲，足が不自由で実妹に介助されて来院。
- 主訴：左右の奥歯が動いて，噛むと痛い。以前からときどき歯ぐきも腫れる。
- 歯科的既往歴：幼少時から歯科を転々と受診。定期的な通院経験はなく，主訴の改善のみ行ってきた。歯

ブラシをしないことが多い，と意識は低い状態であった。

- バックグラウンド：人工透析治療中で，体調がよい日に保険治療による治療を希望。歯科治療に不安があり，納得がいくまで治療内容の説明を求める。入退院を繰り返すも糖尿病はコントロール不良のため，易感染性で，外科的侵襲の大きな治療は避ける必要がある。

診査・診断，治療計画

- どのように診査を進め，診断したか：7は，デンタルエックス線診査で，遠心部の縁下う蝕，根尖部透過像，それに連続する遠心の垂直性骨吸収を認め，歯周精密検査にて同部位のPPDは12mmであり，歯内-歯周病変と診断。7は，根尖部透過像，遠心に垂直性骨吸収を認め，同部位のPPDは6mmであり，垂直性骨吸収をとともなう根尖性歯周炎と診断。どちらも過去に智歯が存在していた可能性が考えられる。

- 診査結果および治療計画説明時の患者の反応：7は抜歯あるいは可及的保存という2通りの計画を提示した。ただし，保存となると時間を要し，治療経過をみ

ながら，場合によっては抜歯になる可能性も説明。定期的な通院がストレスになるのではないかと考え，相談した結果「私の歯のことを自分のことのように考えてくださってうれしいです」という言葉をいただき，保存するための処置を行っていくことで合意した。

- 治療の実際：根尖病変の範囲を見極めるために，感染根管治療を先行した。その間，歯の自然移動による骨レベルの改善をはかった。77は単根で槌状を呈しており，とくにファイリングを中心に根管の水平的な拡大を行った。本来なら歯周外科が必要であるが，全身状態により外科処置は選択できず，歯周基本治療を

歯の保存に全力を尽くす 歯内 - 歯周病変を有する一症例

徹底した。咬合性外傷が一因となった可能性もあり、最終補綴物装着後はスプリントを製作。また、患者は全盲で、聴覚と触覚が敏感であるため、とくに声のトーン

や表現方法、口腔内の扱い方に配慮し、治療全般を自ら行った。

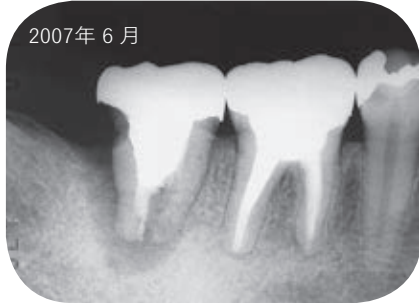


図2 初診時。下顎右側のデンタルエックス線写真。

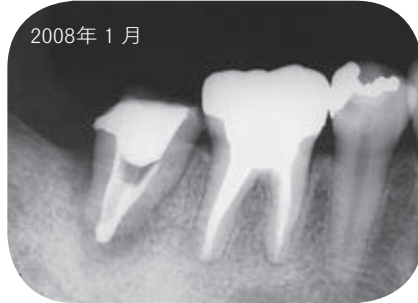


図3 7感染根管治療中。水酸化カルシウム製剤を貼薬し、経過観察を行った。



図4 根尖部透過像に縮小傾向が認められ、この後根管充填を行った。

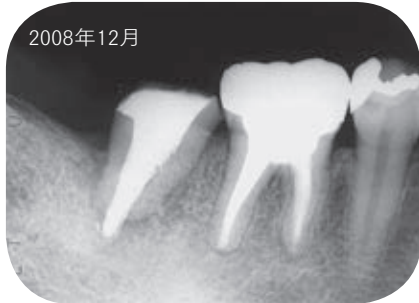


図5 根管充填後6か月。自然移動による挺出と近心傾斜が認められる。

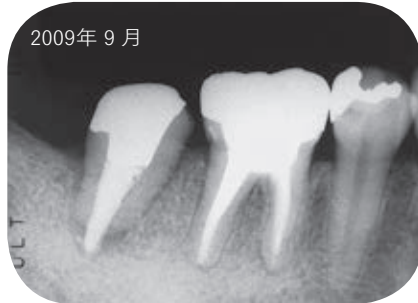


図6 TEKを装着し、近心傾斜を是正するため、アプライトを行った。

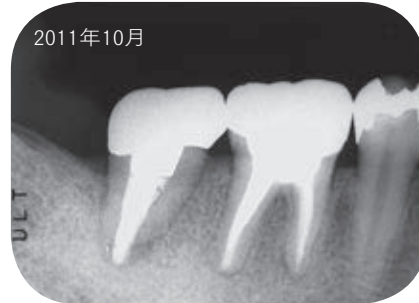


図7 最終補綴物装着後。初診より4年4か月。PPDは全周3mm以下である。



図8 初診時。下顎左側のデンタルエックス線写真。

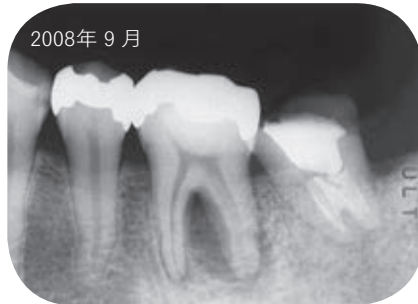


図9 7感染根管治療中。6の根管治療も行った。

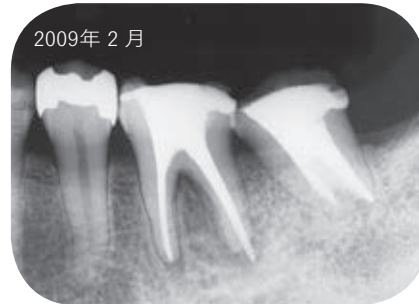


図10 根管充填時。7根尖部透過像が縮小している。

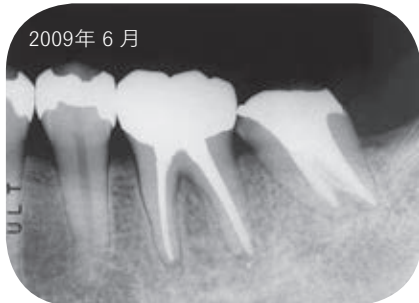


図11 7のPPDは全周3mm以下で遠心の垂直性骨吸収が改善されている。

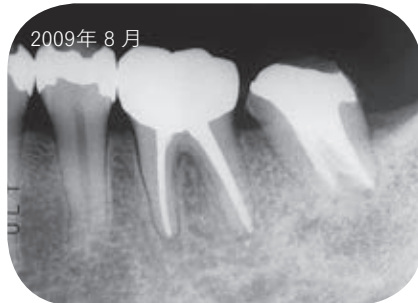


図12 アプライトを行い、歯根間距離の回復をはかった。

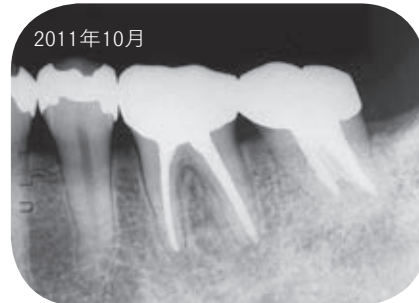


図13 最終補綴物装着後。初診より4年4か月。現在、経過は良好である。

治療結果の自己評価と患者の様子

■自己評価：7|7において、垂直性骨吸収は改善され、根尖部透過像は縮小傾向にある。しかし、患歯の対合歯が天然歯で削除量が制限され、最終補綴物が平坦な咬合面形態となり、手技の甘さがめだつ。長期安定性にはやや不安が残るが、全身既往歴により治療内容に限られ、抜歯か保存かという選択肢のなかで歯の保存に全力を尽くした。卒後3年目に遭遇した症例で、経験のなさから予後が予測できず、手探りの状態で治療を進めたのは反省すべき点である。

■信頼関係が築けたと感じた瞬間：当初は、治療のたびに詳しい説明を希望されたが、次第に「お任せします」といってくださるようになった。「病院には行きたくないけれどここには来たい」と検診には欠かさず来院され、

歯を磨く習慣がないという状態から、現在では微妙な口腔内の変化も気にされるようになり、歯を保存することへの情熱が患者に伝わったと感慨深いものがあった。

■今後の課題：治療技術の向上はもちろん、患者と長くかかわれるように信頼関係の構築に努め、先人たちの教えをもとに実践した自分の治療の経過を追い、経験という礎を築いていきたい。現在、歯科治療の全体像が少しみえてきたという段階。インプラント治療や審美治療などの「できないこと」に挑み、引き出しを増やすためにも、歯科医師として、人間として柔軟な姿勢で学び、精進していきたいと考えている。

師匠からのメッセージ



下川公一

1968年 福岡県立九州歯科大学卒業
1973年 福岡県北九州市小倉北区開業
1993年 福岡県立九州歯科大学口腔病理学教室非常勤講師
2004年 福岡県立九州歯科大学臨床教授
現在、北九州歯学研究会会員、日本審美歯科協会会員、九州歯科大学臨床教授

〔診療方針〕

患者への情熱をもち、天然歯保存に努めている。治療経過を追い、規格性のあるデンタルエックス線写真をもとに自分の手がけた治療の客観的評価を行っている。

▶ケースから感じること

今回は、本当に驚いた。これほどまでに、完璧な感染根管治療の進め方は、私も経験したことがない。柴原先生は、私のところに3年間勤務していた、倉富寛先生の代診を5年間している方である。つねづね、優秀な女性歯科医師であるとは思っていたが、これほどまでにすごいとは驚きを通り越して久しぶりに感動させられた。私も、臨床歴が45年になろうかとしているが、45年前の自分を振り返ってみると、エンドで何が何でも治そうとしていたことを思い出す。患者は、透析治療を続けられており、本来であれば7|7は誰がみても抜歯という診断を下すはずである。それを、患者とのコミュニケーションがうまくいったとはいっても、これほどまでのよい結果がでるとは、ただただ感服するのみである。7|7は、ほとんどが槌状根で、複雑な形態をしており、馬蹄形を呈す場合もあるが、本症例はまさにそれである。わかってはいても、根管を明視して拡大形成するのは、根気だけではなく、知識と才能が必要である。柴原先生は、それらのすべてを兼ね備えた稀にみる才能豊かな臨床家であると確信する。すべてに、文句のつけようがないプレゼンテーションである。

▶さらに成長してもらうためのメッセージ

柴原先生は、倉富先生を通じて知り合ったが、歯科臨床にもってこいの人徳と才能を有している。とくに、エンドは知識に裏付けされた技術と情熱を、見事に臨床に生かして、誰もが感心する臨床結果をだしてきている。おそらく、今の保険制度のなかでこれほどの治療を行うと、不採算のはずであるが、それをさせる院長の倉富先生もすごい。もうすぐ、長崎のご実家に帰って父親と臨床をされると聞いているが、本当によいところに就職し、研鑽された。彼女は、エンドだけではなく、歯科臨床すべてに興味をもち、情熱を注いでいるので放っておいても確実に成長していくはずである。今、WDC(女性歯科医師だけの全国的なスタディグループ)のメンバーとして活躍しているが、将来は中心的な役割を担うはずである。このような女性歯科医師が数多く育ち始めているのが頼もしい限りである。長崎に帰れば、また違った環境のなかで臨床を行うこととなるが、くらとみ歯科クリニックで学んだことを生かしながら、自分の臨床スタイルを確立させてほしい。まだまだ学ぶことが多いとは思いますが、確実に一歩一歩前進している姿を見ると、自分の若いときのことを思い出す。本当にすばらしい症例をみせていただき、私自身が勉強になった。

本欄に対するご意見・ご質問は、本誌編集部：edit-q@quint-j.co.jp までお寄せください。